

梅田を中心とする繁華街「キ

タ」と、難波周辺の「ミナ

ミ」に至る南北を軸に発

展してきた大阪市。そ

れに対し、近年、急

激に進化を遂げてい

るのが東西の軸だ。

「ニシ」は夢洲^{ゆめしま}を中

心とするベイエリア

で、昨年開催された

大阪・関西万博や統合

型リゾート（IR）誘致

が話題。そして今、大きな

注目を集めているのが、大阪城の

東側に広がる「ヒガシ」だ。集中し

て整備を進める都市再生緊急整備地

域に指定されたこともあり、国や自

治体、民間事業者が一体となって新

たなまちづくりが進んでいる。

○大阪公立大学とURが連携

「ヒガシ」の拠点ともいえるのが、

大阪城公園に近接する森之宮エリア

だ。昨年9月には、大阪公立大学の

新キャンパスが開設され、話題をよ

んだ。そして、そこから歩いて13分

ほどの場所に同年10月にオープンし

まちに関わる人の“やってみたい” 想いを支え育む実験フィールド

暮らしと学びの実験フィールド『ほとりで』
大阪市城東区 森之宮団地・
森之宮第2団地 2025年●令和7年～



阿部民子 text by Tamiko Abe

Illustration by Shigeyuki Sakata

りのない細長い空間は大きく3つに分割されており、アクティヴゾーンは交流や情報発信、チャレンジショップなどの利用が可能。フォーカスゾーンと共創ゾーンは時間貸しができるレンタルスペースで、会議やセミナー、ワークショップやイベントにも対応。WiFiや電源、簡単な調理設備なども完備されており、至れり尽くせりだ。

取材に訪れた6月14日は、1960年の映画「団地への招待」の上映や「昭和レトロキッチン」を再現した見学会を開催。赤羽にある「URまちとくらしのミュージアム」にも関わった埼玉大学非常勤講師志岐祐一氏による基調講演、大阪公立大学の武田重昭教授、小池志保子教授、団地愛好家の吉永健一氏、けんちゃん氏によるトークセッションも行われ、多くの人でにぎわった。

トークセッションに登壇した武田教授は「研究者らによる研究会や国内外の他大学との連携の場として、また、学部横断で立ち上げた『森之宮ウィズネイチャラボ』の拠点としても活用しています。学生たち

○まちに熱をもたらず交流拠点

オープンから約9か月。登録会員、インスタグラムのフォロワー数ともに1000人を突破。新たな活動も続々と生まれている。

その一つが、通称『ことりで』だ。会員のママさん、パパさんがおもちゃなどを持ち寄り、自主的にキッズスペースを作製。子どもたちを見守りながら遊べる場をつくり、親同士の交流も誕生。『ままのわ』と称する夜カフェも開催している。ほかに、モーニングを提供する主婦や簡単な運動を行うチームなど、団地の人、地域の人、学生が多彩な活動をしながら、繋がりを広げている。

「いいスタートダッシュが切れているのは、森之宮団地のコミュニティが生かされていることが大きいと思います。利用者の方にも、団地を経営しているURが運営している『ほとりで』という安心感を持っていただいていいるのではないかと思います。先日は仕事をリタイアした森之宮団地在住の方が、この場所で誰かの役に立つことをしたいと相談に来



「ほとりで」には余白があるから、ゆるくつながり、参加したくなる、何か始めたい場所に成長している。

てくださり、新たなコミュニティの場が築かれていることに感動しました」とURの柏井。基調講演を行った志岐氏は「このよさは、スペースに余白があり、かつ自由に入れて安心できること。ゆるやかに繋がる距離感が絶妙」と語り、武田教授も「空間には、場にいる人の雰囲気やにじみ出るもの。『ほとりで』はそれがいい塩梅^{あんばい}だから、訪れる人が、ここなら何かできると感じるのではないでしようか」と分析する。

8月1日には、世界的アーティスト千田泰広氏による「空間美術館ー大阪ー」がオープン。光を駆使した幻想的な空間体験が楽しめる。制作・運営には地域住民や大学生が参加。アート活動に関わる

ことで、参加者自身や暮らしが変わることも期待しているという。地域の人や訪れる人を巻き込みながら、『ほとりで』の活動がまちに暖かな^{ほて}熱^{あつ}りをもたらし

—— 社会課題を、超えていく。 ——



〔企画制作〕新潮社